『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題十二（終）

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、「『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題十一」（愛知県立大学日本文化学部論集　国語国文学科編　第2号　平成23年3月発行）につづくものである。

凡例

一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。

二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。

1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。

2、丁付けは省いた。

3、曲中に付した＼・シテ・アト・――等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書きの傍書に限って（）で括って示した。

4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。

𡗜→喜　厂・鳥→雁　〆→シメ　ゟ→より

6、宛字も多くみられるが、そのままとした。

竹類（畜類）　御行所（御教書）　字文（呪文）

翻刻

土産山伏

山人アト／是ハ此辺りニ住居する山人て御座る　毎も山へ木をこりに参る　今日も山江登ふと存る　誠ニ某程骨折な者は御座らぬ　一日も休む事ハならす毎も〳〵山江行事ちや　イヤ何角と言ふ内に麓江来た　山江登てハ休む所もない　しはらく是に休ふて参らふと存る（ワキサヱ行鎌ト棒ヲ枕元之ニ置ネル）（山伏シテ次第）／大峰かけて葛城や〳〵　我本山ニ帰らん　地返し言葉シ／是ハ出羽の国羽黒山の山伏てす　此度大峯葛城へ分ケ入難行しやしんの行法をも事故のふ相勤メ只今本山へ罷り帰る　先急て参ふ　誠に山伏の行程難行ハない　ある時は岩木を枕とし子に伏し寅におき様〻の行法をも勤ねハ貴い山伏ニハなれぬ事ちや　イヤとつと来たれハ是からハ山ちや　扨〳〵いかふ草臥た是てハ中〳〵山道は得行まいちと休ふて参ふと存る（真中より跡へヨリネル）　アト／是は此辺りの者て御座る　用事有て山壹ツあなたへ参る　先急て参ふ　誠ニとふ参らいて叶わぬ所て御座れ共山道ちやニ依てけふあすと思ふて一日〳〵と遅ふ成た事ちや　イヤ是に山伏かねて居る　ハア又あちらにも人か寝て居る　あれハ山伏の家の人ちやまてよ　イヤ見れハ土産を持て居る定メてあれハ中喰てあらふ某ハ宿を出る時急たニ依てしたゝめを致さなんた殊外とせんな程にあれを此方へ才覚致そうと存る（サシ足シテ取ニ行シテサエ戻り見ケテ見テ）

あんのしやう中喰ちや　先是をたへよう（タイコサエ行ハシ斗リ持テ出ル）　のふ〳〵嬉しやまんまとしたゝめヲ致た今ニもおきたらハ
只は置まい　イヤ致よふかある　山人　ムウよう寝た事かな〳〵先急て山へ登ふ（棒取りニかゝる見ルトツトカナイ）
　是ハ如何な事　中喰の土産か見へぬ　扨〳〵合点の行かぬ事ちや　イヤあれニ何者やら寝て居る　先よふすを尋て見
よう　是〳〵こゝな人〳〵　アト　ムゝよふ寝た事かな〳〵　山人　のふ〳〵　ア　何て御座る　山人　お主ハ某の土
産を取ハせぬか　ア　イヤ爰な者か　りやうしな事をおしやる某ハ山壹ツあなたへ行者ちやか余りくたひれたニ依て爰
に寝て居たか其方か何を持っているやら某ハ知らぬ　山人　と言ふても其方ならてハ取る者ハない　ア　左右言われま
いそや　見れはあれニ何者やら寝て居るか吟味をおしやれ　山人　誠ニ山伏か寝て居る　のふ〳〵爰な人〳〵　シ　ウ
ン扨〳〵久敷う寝た事かな　山人　のふ〳〵　シ　何ちや　山人　そこつな事ちやか某の土産を取りハさしませぬか
シ　イヤ爰な者かりやうしな事を言ふ　人の物を取るよふな山伏てハない　山人　何といわせられても外ニ取る人ハな
いありようふニおしやれ　シ　偽りを言ふて山伏かなる物か　あれにも何者やら居る定メてきやつて有ふ　山人　すれ
ハ取りハ召されぬか　シ　思ひも寄らぬ事ちや　山人　すれハわこりよか取たナア　ア　またいわせらるゝ　最前も言
ふ通り某ハかつゝて知らぬ　シ　イヤ〳〵己ありよふニ言へ　ア　此方迄も迷惑な事をおしやる　イヤのふ〳〵
（山伏のソハニアルツトヲシエル）　兎角吟味をさしませ　山人　是〳〵其方か取たに違ひハない有よふニいわしませ　シ　扨〳〵にくいや
つの某か是悲取たと言うせうこかあるか　山人　いかニもせうこか御さる（ツトヲトリ上ケ見セル）　是か其方のそはニある上ハお
取りやつたに違ひハない　シ　弥悪ひやつの　此尊い山伏になんたいをかけおる　なんたいてハ御座らぬ是かせうこて
御座る　両人　ありようニ言せられい　シ　此上はかん忍ならぬ　ふとふのかなしわりを言ふ物にして己か取たか又そ
ちかくうて身ニなんたいを言、かくるか忍せうこをあらハす　それても言わぬか　ア　あのよふニいわせらるゝ　定メ
て取りハさせられまい　最早堪忍のしてやらしませ　山人　イヤ〳〵とふあつても堪忍ならぬ　シ　己ありよふニいわ
すハあとて悔ふかな　二人　何の悔もうそ（山伏インヲムスヒ両方ヘカクル初メ山人ノ方ヲイノル）　ア　おかしい事の　あの様な者にはかまわすとも某
ハいのふ　山人　イヤ〳〵いなしてハならぬ（アトヲツレニ行時山伏アトヲイノル）　ア　是ハ何んとする　山人　扨〳〵気毒な事ちや　ア

ア、先待て被下　シ　夫ならハありよふニ言へ　ア　ても某ハ取りハ致さぬ　シ　ありよふにいわすハ祈殺スかいわぬか　ア　取りハ致さぬ　シ　扨〳〵悪ひやつの重而珠数をおしもんて（イノル常ノコトシ）　山人　扨〳〵お手柄て御座る　私のそゝふを申ました　最早堪忍をさせられい　シ　イヤ〳〵祈殺さねハならぬ　山人　平ニ堪忍してやらせられい（山伏ノ手ヲトリ楽屋ヘイルナリ）　ア　のふ〳〵祈戻してゆるして被下〳〵ア、人の物を盗てくわまい物ちや　手足もかなわぬ（ト言テトメル）

シテ山伏　常ノことく
アト山人　羽織半クゝリ　棒ツト鎌持つ
、使ノ者　半上下
入用　棒　カマ　ツト

松脂

亭主　是は此辺りニ住居する有徳な者て御座る　毎年嘉例て今日ハ松拍子を致す　先当りの衆を呼ニ遣ふと存る　太郎官者有るか　如常　亭主　汝呼出ス別の事てない　毎もとハ申なから目出度春てハないか　太　御意被成るゝ通り目出度お正月て御座る　亭主　夫ニ付今日は嘉例て松拍子する　汝は大儀なから何れもの方へ居て御出被成て被下るゝよふにと言て来い　太　畏て御座る　亭主　急て往て頓而戻れ　太　ハア　亭主　エイ　太　ハア扨〻火急な御用を被仰付た　殿方へ参ふそ　イヤ先誰殿へ参ふ　誠ニ月日の立は早い物て御さる　去年殿方も御出被成たを近頃の事のよふニ存たに早や一ト年セ立た事ちや　イヤ何角といふ内に是ちや　物申案内申　頭　イヤ表ニ案内かある　案内ハ誰そ　太　私て御さる　頭　エイ太郎官者何と思ふて来た　太　頼ふた物申升ハ弥御替り被成るゝ事も御座らぬか　左様御座

らハ例年の通り松拍子ヲ致シとふ御さる　何卒御出被成て被下るゝよふニと申越しました　頭　やれ〳〵夫はよふこそ言ふて汝を被下たれ　幸ひ何れも是へ寄て御座る　追付それへ参ふと言へ　太　夫は忝ふ存升　左様ならハ最ふこふ参り升　頭　よふ来た　太　ハア申上升　誰殿江参て御座れハ殿方もあれへ御寄なされて御座つて追付お出被成升　亭主　夫は一段ちや　見へたらハ此方へ言へ　太　畏て御座る　頭　のふ〳〵何れも御座るか　各　是ニおり升〳〵〳〵　頭　只今誰殿より毎もの通り松拍子をする程に参るよふニと申て太郎官者か参つて御座る　いさ参り升まいか　各　一段とよふ御座らふ　頭　サア〳〵何れも御出なされ　各　心得ました　頭　物申案内申　太郎官者来たそ　太　よふ御出被成ました先こふお通り被成ませ　頭　心得た　太　ハア殿方も御出て御さる　亭　心得たやれ〳〵何れもおそろいてよふこそ御出被成ました　つうと御通り被成ませ　各　心得ました　頭　扨今日ハ不相替目出度ふ御座る　二　目出とふ御座る　三　毎もなから召寄られて忝ふ御座る　四　某共も忝ふ御座る　五　忝ふ御座る　亭　殿方も御揃被成て不相替お出被下て此よふな嬉敷事ハ御座らぬ　頭　扨当年ハいつ〳〵よりも目出度春て御さる　亭　被仰るゝ通りのとかな春て御さる　扨毎もの通り松拍子を致とう御存るか何と御座らふ　頭　是ハ一段とよふ御座らふ　亭　左様ならハ毎も御存の通り毎年目出度事ヲ替へて拍子升　当年ハ何とした物て御座らふそ　されハ何とかよふ御座ふそ　二　某の存るハ松程目出度物は御さらぬニ依て只松〻と申て囃子升まいか　亭　是は面白ふ御座る　何れもハ何と思召ス　三　是ニすきた目出度事ハ御さるまい　亭　左右あらハ囃子ませうか　頭　よふ御座らふ　亭　何れもはやさせられい　各　心得ました　皆　松　〻　〻　〻　〻　〻　〻　各　笑　亭　是てハ跡か納らいてすまぬ物て御さる　二　言せらる〻通りて御座る　何と致た物て御さらうそ　三　身共の思ひ升わ松にハ脂のそう物て御座る程に松脂やによ小松やにやによ抔と囃子ましてハ何と御さらう　亭　是ハ面白ふ成ました囃子ませう是へよらせられい　各　心得ました　亭　イサ囃子ませう　各　急てはやさせられい　各　松脂やによ小松脂やによ〳〵〳〵〳〵　亭　是ハ見なれぬ御方て御座るか殿方て御座る　シテ　先某を誰て有ふと思ふそ　亭　囃子物を致すとお出被成た程に囃子ハかたの如くの神てハ御さらぬか　シテ　いかな〳〵囃子ハかたことて不調法な　亭　左様ならハ松風

シテ拍子ニ付テ出ル

の吹よふニさわ〳〵と存ましたれハお出被成た程に松のせいてハ御さらぬか　シ　大方にすいした　松にハのかれぬ物ちや　日に当れハたらりにやりとする物ちや　亭　左様ならハ松脂の情て御座るか　シテ　おそいすいかな　そち衆は身共か名を呼に依て目出度折からなれハ囃子物に引かれて松脂の情い是迄あらわれ出たそ　亭　夫は近頃目出度存し升る　先こふお通り被成ませ　シテ　心得た　亭　先お腰をかけさせられませ　シテ　こゝろへた　亭　とてもの事に松脂の目出度いわれ承りとふ御座る　シテ　是迄出た程ちや程に語て聞かせう　よふ聞かしませ　語り　シテ　夫松は目出度子細といつハ日の本に其数多しと言へとも唐土にハていことといつし者の母夢中に子の日の松をふくみたいなひにやとると見て男子をもうく　此子兄弟一成事其国にならひなし　されは十八才ニして王位にそなわる故に松とハ十八の公とかくも此言われなり　是皆某か斗り事そかし　又和歌の道にては住吉に四所の松高砂に尾上の松彼是に至る迄千年の命をふると言ふも我等のはしり廻りめくみをあとおるか故也　イヤ夫迄もあるまし一張の弓にて天下を治シ事も此松脂をつるニ引てこそ異国のてきも亡し給へ　なんほう目出度き物ニては候らわぬか　亭　扨〳〵目出たいお物語りを承て忝ふ御座る　各　忝ふ御座る　亭　のふ〳〵殿方も何と思召此所へお出被成たこそ幸なれ　此目出度松脂をくすねに煉り升まいか　頭　是ハ尤て御さる　二　一段とよふ御さらう　亭　申〳〵かゝる目出度い松脂の御出を幸に何れもくすねに煉とう存升　シテ　何ちや此松脂をくすねに煉りたいと言ふか　亭　左様て御さる　シテ　是ハ迷惑な事を言ふ中〳〵成るまい　頭　今此時に生れ逢ひましたこそ幸なれ　善悪煉りませう　シテ　イヤ〳〵ねらるゝ事ハ斟酌ちや乍去夫程望むならハくすねハかけんか大事ちや　其上弓のつるニ引て魔縁化生の者まても障けなさぬ煉よふか有る程に我等手つから此在所に目出度ふ煉納めてやらふそ　亭　夫は猶以て忝ふ存升ス　各　忝ふ存升ス　シテ　出〳〵くすねを煉らんとてくすねかわをおゝきにこしらゑ此松脂を取いれて如何ニもねわくあやかれとて煉つめてこそかへりけれ家を納むる弓のつる〳〵に引くためしも久し松脂かな

シテ松脂　アツイタハツヒハンキリ黒頭　末社頭巾ニテモ鼻ヒキ

アト亭主　長上下
、太郎官者　半上下
、立衆　長上下
入用　くまのアヲリ　かつら桶

茸

アト　是ハ此辺りの者て御座る　某の屋敷に当年ハ始メて茸か出来て御座る　内〻の念願て御座つたニ此様ナ嬉敷事ハ御さらぬ　爰に御念ころなお山伏か御座る程ニ是をお頼ミ申弥茸の栄へるよふニ加持を致て貰ふと存る　誠ニ殊の外見事な茸て御さる　何と申茸かも存せぬ　定而お山伏のよふ御存て御さらふ　イヤ是ちや物申案内申

楽ヤノカタヲムキ案内乞カタヒサツキ下ニヲル山伏出ル

シテ　九しきの窓の前へ十丈のゆかのほとりにゆかのほつすいをた〻へ三みつの月をすます所に案内申さんとハ誰そ　ア　私てこさる　トタツ　シ　イヤ爰な者か　其様に足元から鳥の立よふニする物か　ア　ハア　シ　して先けふハ何と思ふて来さしました　ア　只今参る別の事ても御座らぬ　私の屋敷に当年ハ初メて茸か出来ました　何卒御出被成て弥出来まするよふに一加持被成て被下りやうならハ忝ふ存升　シ　重忽(ママ)な事ちや乍去今日ハ別行の子細有て何方へも出ね共其方の事ちや程にいておませうそ　ア　夫ハ忝ふ御座るいさ御出被成ませ　シ　先其方からお行きやれ　ア　左様ならハ御案内の為私から参りませうか　シ　一段とよかろう　ア　さあ〳〵御出被成ませ　シ　心得た　ア　誠ニ今日ハ此方御出被成て被下て忝ふ御さる　シ　某かいたらハ夥敷う出来るよふニ加持をしてやらふそ　ア　夫は忝ふ御さる　イヤ何角言ふ内に是て御さる　シ　いかにも是ちや　ア　先斯ふ御通り被成ませ　シ　心得た

山伏ワキサアトシテサ

シ　扨先何か出来ておりやる　ア　何と申茸かハ存せぬか見事な茸て御さる　シ　身共か見たらハ知る〻

てあらう　してとれに出来たそ　ア　是て御さる　シ　扨〻見事な茸ちや　ア　何と申茸て御さる　シ　是ハ松たけておりやる　ア　余り見事な茸て御さるニ依てまつたけ共存ませなんた　先一加持被成て被下　シ　心得た先一加持してやらふそ　ア　夫は忝ふ御さる　シ　夫山伏といつは山におき伏ニ依て山伏也　ア　尤な事て御さる　シ　ときんといつは布切れ壹尺斗り墨ニ染むさとひたを取ていたゝくに依てときんなり　ア　尤（聞へた）な事て御さるときんとい　シ　いら高の珠数てハのふて只むさとしたる珠数玉をつなきあつめいら高の珠数と名付ケ今一祈いのるならハなとか気毒のなかるらん　ほうろんほろう〳〵〳〵〳〵　ア　申〳〵是へも出ました　シ　誠ニ是へも出た　ア　是ハ何て御さる　シ　是ハ平茸ちや　ア　是ハ忝ふ存升弥栄るよふニ祈て被下　シ　心得た　いろはにほへとんと祈ならハ弥茸栄へさせんちりぬるをわかなれ　ほふろんほろう〳〵〳〵〳〵　ア　申〳〵　是へも出来ました是ハ何て御さる　シ　ハ、ア紅粉茸ておりやる　ア　扨〳〵嬉敷事て御さる情を出して祈て被下　シ　重而珠数をおしもんてほうろんほろう〳〵〳〵　ア　又出来ました　シ　扨〳〵目出度事ちや　是ハ礼右（石）と言ふ福貴繁昌に栄へる所へ出来いて叶わぬ物ちや　ア　夫ハ猶又悦しう存升最そつと祈て被下　シ　心得た　一にこんから二にせいたか三にくりからしつたい八躰寿命長久福貴円満ほうろんほらう〳〵

内に茸ウコキ出シ山伏ニヒツ、クアト
エモヨル祈〳〵入ルナリ色〻シカ〳〵アリ

同仕替

ア　是ハ此辺りの者て御座る　某屋敷に当年始メて何ともしれぬ茸か出来て御座るニ依てひた物取て捨れ共所をも替へす夜の間に出来る　か様な不思儀（シ）な事ハ御さらぬ　夫ニ付て爰に法力のつよいお山伏か有る　是をお頼み申祈祷を致して見ようと存る　誠ニ御先達の御出被成たらハ定而様子か知るゝて御さろう　何卒お宿に御されハよいか　イヤ何かと言ふ内に是ちや先案内を乞ふ　前ノ六儀ト同断　何の為来たト言　ア　只今参る別の事ても御さらぬ　私の屋敷に当年初メて何とも知れぬ大キな茸か生へまして御さる　ひた物取て捨れ共所もかゑす夜の間に出来升る　あまり不思儀に存升るニ依て此方を

お頼み申一加持致て貰ふと存て参りました　何卒御出被成て被下りやうならハ忝ふ存しませう　シテ　扨〳〵其様な事ハ知らなんた　茸の生る事ハ有る物なれ共其如く又しても〳〵生ると言ふハ不思儀な事ちや　乍去此間は別行の子細有て何方へも行かね共其方の事ちや程に往ておましよふそ　ア　夫ハ近頃忝ふ存升ス　そうあらハイサ御出被成ませ　シ　案内の為め其方からお行きやれ　ア　左様ならハ私から参りませう　シ　一段とよかろふ　ア　さあ〳〵御出被成ませ　シ　心得た　ア　誠ニ今日ハお出被成て被下て忝ふ存升る　シ　身共かいたらハ定メ而様子か知るゝて有ウ　ア　イヤ何角と言ふ内に是て御さる　シ　誠ニ是れちや　ア　先こふ御通り被成ませ　シ　心得た（イリチカイワキサエ行アトシテ杜へ行）　シ　扨咄の茸ハとれに有るそ　ア　是に御さり升ス　シ　ハゝアすさましい茸ちや　是ハ松茸ておりやる　ア　余り大きう御座るニ依て松茸とハ存ませなんた　シ　扨是迄此よふな物の生へた事ハおりないか　ア　ついに承り及ませぬ　当年初メてで御座る　何卒一加持被成て被下ふならハ忝ふ存ませう　シ　気遣ひおしやるな一祈いのつて忽祈けしてやろうふそ　ア　夫は忝ふ存升る　〳〵前ノ同断　ア　ハゝアうこき升る　シ　追付祈けしてやらふそ　ア　忝ふ存升る（イノル茸アトノソハエ出ル）　ア　ハア申又是へ出ました　シ　誠ニそれへも出た　是ハ椎たけそうな　最一祈いのりけしてやらふそ　ア　お頼ミ申升　シ　橋の下のせうふハ誰か植たせうふよほうろんほろう〳〵おれか植たせうふよほうろんほろう　〳〵（内追ノ〳〵シテアトノソハエ出ル）　ア　又是へ出ました　シ　誠ニ出た　気遣ひするな　物の滅せふ迚ハ此ことくふゆる物ちや　心易思召しませ（ニ）　ア　か様にふへましてハ何とも気毒に存升早ふ祈けして被下　シ　此度ハふきの印のむすひかけておませう　ア　兎も角も早ふ祈けして被下（山伏印ヲムスヒイノル夫より茸追ゝ出テ山伏アト追込ナリ仕様アルヘし）　シ　ハアゆるして呉れい〳〵　祈〳〵入仕様工風アルナシ

シテ山伏　厚板　水衣　袴クゝリ　トキン　少刀　珠数　腰帯　スゝカケ
男　長上下　半上下ニテモヨシ
親茸　嶋下クゝリ　水衣　ソハツキ　モキトウニテモ

小茸　塗笠　菅笠　桧カサ
面　網代笠　ケントク　ウソフキ　フクメン(ママ)
小袖ツホヲリニテモ色〻アルナヘシ

鞠座頭

シテ　是ハ何の勾当て御座る　此中仲間の参会ハ打続た事ちや　今日ハ某の方江何れも咄しに見ゆる筈ちや　先精市を呼出シ何れもへ遣ふと存る　精市あるか　カス市　ハア　シ　居たか　カ　御前に　シ　汝呼出ス別の事てない　此中ハ仲間の参会ハ打続た事てハない(ママ)　カ　御意被成る〻通り毎日の事て御座る　シ　夫ニ付て今日ハ某の方江何れも見ゆる筈ちや　汝ハ乍太儀何れもへ居て御供申て来い　カ　畏て御座る　シ　急て行　カ　ハア　シ　ヱイ　カ　ハア扨殿方へ参らふそ　イヤ先何の勾頭様江参ふ　誠ニ此中の御参会ハ打続た事ちや　定而今日も皆ゆるりと御咄シ被成る〻て有ふ　イヤ何角と言ふ内に是ちや　先案内を乞ふ　物申案内申　頭　表ニ案内か有る　精一か　カ　左様て御座り升　申され升ハもはや時もよふ御座るニ依て御出被成て下さる〻様ニと申てこ(ママ)越されました　頭　よふこそ汝を被下た　幸ひ何れも是へ寄て御さる　同道致て追付夫へ参らふと言へ　カ　畏て御座る　申上升　誰殿へ参つて御座るか殿方もあれへ寄て御さつて追付是へ御出被成升ス　シ　夫ハ一段ちや　御出被成たらハ御通り被成いと言へ　カ　畏て御さる　頭　のふ〳〵何れも御さるか　各　是ニおり升ス〳〵〳〵〳〵(各楽屋より出ル)　頭　只今何の勾頭殿方から参るよふニとて精市をおこされました　いさ参り升まいか　各　一段とよふ御さらふ(各色〳〵シカ〳〵アリ)　頭　さあ〳〵御され　各　心得ました　シカ〳〵　頭　ヤイ〳〵精市来たそ　カ　御出被成ましたか　二　某も来たそ　カ　先こふ御通り被成ませ　頭　是〳〵此杖を預るそ　カ　是へ下され(ト言テタイコサニヲク)　二　身共も預るそ(シカ〳〵同断)　カ　心へました　各　今日ハ忝ふ御座る〳〵〳〵〳〵　シ　誰殿〳〵〳〵〳〵　是ハ何れもよふこそ御出被成て被下た先下ニ御され　各　心得まし

た　頭　御人を被下す共参ふニ御念の入った　精市を被下忝ふ御さる　各　忝ふ御さる　シ　ゆるりと御咄し申とふ存て呼に進して御さる　頭　幸いつれも寄て御さつたニ依て早束同道致て参た　シ　夫ハよい所て御さつた精市御盃を持て　カ　畏て御さる　頭（立衆ノ内ニ言ふ）　シ　扨此中ハ何に勾頭と殿の所の御亭主の時ハ殊の外夜かふけました　定而御勝手ニハ嘸御草臥てこさろうふ　頭　何れも何れも御早ふ御帰りあつたと有てあとて残念を致ました（ト言内ニ精市ヲ〻キヒラキ盃持出ル）　カ　夫ならハ是から始御盃持まして御さる　シ　いさとれから成共初メさせられい　頭　先御亭主から初メさせられ　シ　夫ならハ是から始メませう（ト言テノム立頭ヘサス）　シカ〳〵　頭　是へ被下れ　（シテ）小ウタ（イ）（頭　こなたへ進ませう　二　いたゝきませう（ト言テウケ舞所望スルシテ舞也舞ノ内ニノム）　シ　是へ被下（立頭小ウタ）　カ　そなたも　壹ツおあかり被成ませ　三　某ハ呑まぬかよう御座るついて呉いノム　殿方へ成共慮外申ふ　頭　頂きませう　是へ被下　シテ　精市そちも何そ御肴を申せ　カ　畏て御さる（小ウタ　ウトウ）　各　よいや〳〵　頭　ちと精市へさそふ　カ　夫難有ふ存升ス　シテ　扨誰殿　精市か内〻願ひか御さる頭　夫ハ何て御さる　シテ　こなたの平家を承り度と申てかね〳〵願ひて御さる一句被成て聞かさせられい　頭　何れもの前て某の平家ハ如何なれ共精市か志かやさしう御座る　一句語りませう　カ　夫ハ忝ふ御さる　各　夫ハよふ御座らふ（ナト言ふ各シカ〳〵）　頭　平家（シテ精市各ホメル）　頭　笑　先このよふな物ちや程に随分情を出せ　カ　成程随分情を出しませうシテ　扨此頃誰殿か将碁（セウキ）ハいこうふ出来ました（此ノ六記一ノアトサシテイウ）　頭　いわせらるゝ通りいこふ出来たそふニ御さる二　されハ始（ハシメ）メハこかし升たか後ハ桂馬を上り過きまして負ました　シテ　残り多い将基て御座つた　頭　某ハ双六かすてきておりふし打まするかきをいかあつて面白物て御さる　二　身共もおりふしハ打まする　シテ　成程双六も面白い物て御座れ共　気毒は目の出たの出ぬのと言ふて某共にちとさし合て御さる（ト各笑）　シテ　扨此中ハまりかいかふはやり升のふ　頭　何れ時行と見へて身共の隣てもほん〳〵音かします　シテ　是もきをいか（の）有て面白そふな物なれ共某共のなくさみニハならぬに依て気毒て御座る　二　某共のならぬ事て御座る　三　其通りて御座る　カ　私ハ致様てけられそふな物かと存まする　シテ　夫ハ何としてける事ちや　カ　鞠ニ鈴を付て其音をしたふてけたらハけられそふな物ちやと存ま升（ママ）る　頭　是ハ精市かよいしやんちや　三　左様て御さる　シテ　何となくさみニけて見ませうか　頭

是ハ一段とよふ御座らふ　二　是ハ面白御さらふ　三　其通りて御さる　シテ　精市其用意をせい　カ　畏て御さる
頭　是ハ珍ら敷(ママ)しいなくさみて御さる　シテ　さあ〳〵いつれも鞠ける用意をさせられい　各　心得ました
（ト言てシカ〳〵アツテ各モミタチトリナラブナリ）　頭　某ハ此角みへ参らふ　シテ　身共ハ此辺り江参りませう　二　私ハこう致そふ　シテ　殿方
も並はせられたか　各　左様て御さる　カ　鞠に鈴を付ました　シテ　左右あらハ汝からけり出セ（各　それがようふ
御座らう）　カ　心得ました（ト言テ舞台ニテハイト言テケダス又ケル内皆〳〵仕様アルヘシ口伝ナリ行当り御免〳〵抔言ふヲキビスヲトリコレニアルナトト言ふ精市コレニ御座るト又ケダス立合仕様アルナシ各狂言心得アルヘキ者勤ムヘシソノウチ目アキ出ル）
目アキ　是ハ此辺りの者て御座る　承れハ座頭か鞠をけると申　よいなくさみて御座らふ　参り見物致そふと存る
（ト言テ廻りカケ見テ笑色〳〵仕様アルヘシ後ニ）　致よふか有る（ト言テ色〳〵シカ〳〵アリマリヲフルナリ）　是ハ面白いちとけん咲(ママ)をさせてなくさもふ（ト言テ扇ニテミナ〳〵タヽク各色〳〵シカ〳〵アリ）
頭　是ハなせ身共をたゝかせらるゝ　二　某ハ鞠を尋て居り升ス　あいた〳〵　扨〻腹の立事ちや
目アキ　笑〻　シテ　のふ〳〵何れもしづまらせられい　何者やら目明か来てなぶると見へて笑声か致ス　各　誠ニ笑
声か致ス　シテ　扨〳〵腹の立事て御さる　目くら打ニ致そう　各　よふ御さろうふ　シテ　皆ぬからせらるゝな
各　心得ました　シテ　精市杖を呉い　カ　畏て御座る（杖ヲ出シ各〳〵取テ　目アキ　タヽキ廻）　こちちや〳〵笑ナリ　各　悪ひやつ
の（ト言テ追廻スハシカヽリへ向て笑）　カ　目の見へぬ者をなぶりおつて　ト言テカスイチシテヲタヽク　シテ　ヤイ身共しやわいやい　カ
是ハ御免被成ませ（ト言テ互ニ杖ニテタヽク御免〳〵と言ふヲイコミナリ口伝ヲヽシ各モヽタチヒモ付ル）

シテ亭主勾当　無地のしめ　長袴　下衣
アト立衆勾当右同断　角帽子　扇
アト精市　但シ小帽子小キ嶋袷抔ニテモ不苦下斗り衣ナシモ交下ナク
同目明　イツレモヽタチヒモ付ルナリツネノ袴ノクライニナルヨウニモヽタチヲトルナリ
嶋　袴　カウシ頭巾
腰帯　扇
嶋　狂言上下

作り物鞠ニ鈴付ル

竹杖かつら桶ふた

牛盗人

牛奉行シテ〳〵鳥羽のりきうの牛奉行て御座る　去程に法皇御幸の節御車を引御牛を某預り牛部屋ニ番人指置昼夜守護致ス所に頃日雨の夜に盗賊のわさと覚へて御預りの牛か失て御さる　隣郷ハ申ニ不及山〳〵峯〳〵迄尋るといへ共兎角其牛の行衛か知れぬ　公卿大臣御詮儀の上牛盗人を訴人致す者あらハ同類共其料をゆるし　ほうヒハ何にてもあれ其者の願いをお叶へ被成んとのお事て御座る　先此よし高札を打ふと存る　シテ柱ニウツ如常二人呼出ス出ルモ如常　彼牛盗人か知れぬニ依て此度高札を上日様にとの御事ちや高札の表に付て訴人か来たらハ此方へ申せ　太〳〵畏て御座る　云付ツメテウケモ如常　子〳〵是ハ此辺りの者て御座る　鳥羽のりきうの牛盗人を訴人いたしたらハ同類たり共其料をゆるしほふひハ何成共其者の願ひを御叶へなされうとの高札て御座る　某存て御さる程に訴人に出ふと存る　誠ニ人のとかを訴人致すハ不心得な事て御座れ共身にこへたふかい願いか御さるニ依て思ひ立た事ちや　イヤ何角と言ふ内に是ちや　先案内を乞ふ　物申案内申　太〳〵イヤ表に案内か有る　案内ハ誰そ　子〳〵牛盗人の訴人の者て御さる　此よし被仰て被下　太〳〵其由申上ふ　しはらく夫ニ待ませい　子〳〵畏て御さる　太〳〵申上升牛盗人の訴人と申ておさなき者か参て御さる　奉〳〵急て是へ出せ　太〳〵畏て御さる　さあ〳〵あれへ出ませい　出ル　奉〳〵ヤイ〳〵牛盗人の訴人と言ふハ汝か　子〳〵中〳〵私て御座る　奉〳〵扨〳〵利根そうふな子ちやナア　太〳〵左様て御さり升　奉〳〵はてよふ来たなア　最そつとそはへよれ　こわい事も何もない某か尋ねる事をあり様にいふならハそちにほふひをとらしう（ママ）　しかも何なりとも汝かほしい物を言へ　いか程成ともやらふす　扨そちハ牛盗人を知て居るか　子〳〵よふ存ております　奉〳〵扨夫は何者か盗たそ　子〳〵隣在所の兵庫三郎と申者か盗て他郷の市へ引て往て売て御座る　奉〳〵夫ハ慥な証こか有るか　子〳〵証拠迄ニハ及ませぬ　三郎を召よせられい

たいけつの上て白状致させませう　奉　是ハ慥な事ちやヤイ〳〵　次郎官者　此おさない者をかたわらへよせておけ
次　畏て御座る　是へ寄ていさしませ　子　心得ました　奉　ヤイ〳〵両人の者　今のを聞いたか　両人　成程承ツ
て御さる　奉　扨隣在所の兵庫三郎を見知て居るか　太　家ハ存しており升るかつらハ存ませぬ　奉　次郎官者ハ見知
て居るか　次　成程つらハ存しており升か家は存ませぬ　奉　何ニもせよ両人隣在所江往て兵庫三らをそひき出してつ
つてこひ　両人　畏て御さる　奉　異儀ニ及わハからめ取てこい　太　其段な御気遣ひ被成升な　奉　ぬかるな〳〵
両人　ハア　奉　急け〳〵　太　畏て御座る　奉　エイ　両人　ハア　太　扨〻一大事を仰付られた　先縄を用意めさ
れ　次　心得た　取り縄を用意した　太　さあ〳〵おりやれ　次　心得た　廻ル　太　何と思ふそ　きやつハ強力者ち
やも知れぬ　兎角たますニ手なしちや　某か案内を乞ふてそひき出そう　そちハむたいに縄をかけいよ　次　成程心得
た　次　随分ぬかるな　次　心得た　太　イヤ何角と言ふ内に慥ニ此家ちや　先ツ案内を乞ふ　そちハ片かけにかこう
て居よ　次　心得た　橋懸りムキ案内乞ふ　太　物申案内申　シテ　イヤ表に案内かあるハア、何とやらむなさわきかする　其上
空のけしきか何とやら気に当て安からぬ　唯事とハ思われぬ　案内とハ誰そ　太　何と兵庫三郎ハそなたか　シ　成程
身共ちや　何の用てお尋ある　太　夫ならハちと願みたい事か有る　表てへ出てくれさしませ　シ　心得た　扨頼みた
い事とハ何事ちや　次　とつたそ　二ら太ら二人中カエリシカ〳〵　シ　やら不思儀ナむたいに縄をかくるハ何事ちや　太　何事ちや
知らぬか　鳥羽の休久の牛奉行より用事か有るつれて参れとの事ちや　さあ〳〵急てゆけ　シ　夫は人たかへてあらふ
次　人たかへても苦しうないとのことちや　シ　是ハ存もよらぬお主達後悔をせうそ　太　夫ハそちかかもふ事ハな
い　さあ〳〵あゆめ〳〵何角と言ふ内に判談所ちや　是ちやアモヨシ　申上ふ程に次郎官者縄をよふしめてしわらくひかへて居よ　次
急て申上さしませ　太　申上升　兵庫三郎をからめ取て参て御さる　奉　出来た〳〵　急て是へ引出せ　太　畏て御さ
る　さあ〳〵あれへひかしませ　次　心得た　奉　ヤイ〳〵兵庫三郎と言わ汝か事ちやなア　シ　いかにも私て御さる
奉　汝はお預りの牛を盗み取つたな　シ　是ハ思ひもよらぬ事て御さる　扨は取手の衆のむかわれたハ牛盗人の御せ
んきて御さるな　身共におひてかつて覚へは御さらぬ　奉　あのまさ〳〵敷いつらわいの縄を急度しめ上イこうもんニ

も及はぬ則訴人を此方に留置た　かくさすとも白状せい　シ　訴人の有ふよふか御さらぬ　何者かサンソウいたしたり共私ニおゐて覚へは御座らぬ　奉　扨も〳〵にくいやつかな　急て訴人を出せ　太　畏て御さる　さあ〳〵あれへ出さしませ　シ　ヤア訴人と仰らるゝハきやつて御さるか　奉　おんてもない事　シ　あの子かヤア　奉　大方様子か知れた　最そつと縄をしめ上いヤイ　子　是〳〵兵庫三郎身共か訴人するうへハのかれハあるまい　白状召され　シ　そちハ誰そにたのまれて訴人したか何として訴人にハ出たそ何と思ふて訴人したそいやい　奉　何をぬかしおる　たまりおろう　何とあの三郎とハ近付か　子　今迄ハ申上ませなんた　兵庫三郎ハ私の親て御さる　奉　ヤアそちか親か　子　中〳〵子として親のとかを訴人いたすに何とかくされう　さあ〳〵白状召され　シ　南無三宝是程まてに天命に付き果る物か　此上ハ何をかくしませう成程私か牛を盗まして御座る　則牛のあり所もまつすくに申上ケませう　奉　左右もおりやるまい　縄を急度しめ上い　シ　ヤイ〳〵そこな人てなしめ己ハ何と天摩か入替わつて子として親の料を訴人ニハ出たはいやい　子と成り親となるハ重〳〵の因縁て有ふに己と身共は悪縁てこそあらふすれ夫とハ知らす己か出生したれハ近所隣りからもやれういの子におの子をもうけて兵庫三郎はくわほう者よあやかり者よとはやされて夫婦の者は夜も日も寝すニ己をたきかゝへしてそたて上ケ引のはすよふニ成じんを祈たも末〳〵ハおのれニかゝろう物てハないか

四ツ五ツの頃ハ髪もしよほ〳〵はへて牛にも馬にもふまれぬよふになつたれハ東西も覚へおらふと思ふて不便のくわへ十歳ニもなつたれハおのれやれ十五にもなつたらハ元服をさせて男にして地頭殿への勤メをも仕覚へさせ身共か片腕にしてさりゆるを詠めたいと夫婦の者か願ふたか悔しい　己か様な悪人と知らひて月日を送たか悔しい　ナク　奉　扨〳〵みれんなやつちや　子にとかハない　己の心のすくにない事をうらみおらふ　縄を急度しめ上い　言語道断にくひやつちや　先何として大事の牛を盗んた子細をまつすくに申せ　シ　成程子細か御さる　当年ハ私の親の遠忌て御座れとも身の上不勝手ゆへ諸事をとりおこのふ銀か御さらぬ　夫故牛を盗み他郷の市へ引て往て売代なし其あたいを僧衆の布施に致そうと存て盗て御座る　奉　アノ言〻おる事をきけ　ヤイうつけ　親の追善に牛を盗て何と孝養になる物ちやそいやい　シ　惣して殺生ちうどうしやいんもうこおんしゆかいとて皆是仏のいましめなり　仏在世の御時しゆうしん

比丘(ヒク)とてひんせん第一なる御弟子のありしか　親の追せんあらんと思召せ共さらに叶わす　ある処にて牛を壹疋盗み取り盗んたる牛売らふいへわ勿躰なし　唯売らふといへハもうこかいをやふる　所詮山ニ入て諸木にもうこかいを授(サス)ケ戒の布施にとらばやと思召頓て深山に分ケ入諸木にもうこ界(カイ)ヲさつけ夫より布施に取たる牛売ふとのたまへハ市人出合布にかゆる其儘お僧を供養し彼の布をふせにまいらする　則布施とハぬのをほとこすとかきたるも此いわれなり　仏弟子の御身にさへ牛を盗んて親の追善をしたもう　いはんや凡夫の某牛を盗んて親を弔ふ事何の子細も御さるまい　奉／盗をする程のやつなれともこさか敷事をいゝ出した　乍去りんけん出て二タたひかへらす　罪料の軽重(ケイシウ)ハ追而の事先急きこく屋へ引ケ〳〵　二人／畏て御さるさあ〳〵たて〳〵　子／アゝ先御待被成ませい　高札にハ盗人を訴人致さわ(サハ)御ほふびハ何にても其者の願ひを叶へられうとの御事てハ御さらぬか　奉／成程其通りちや　イヤ盗人の詮儀に時刻をうつしてそちの褒美のさたを遅なわつた　何成共ねかへ金銀米銭但シまんちうかほしいか　子／イヤ左様な物てハ御座らぬ　兵庫三郎か命をたすけて私に被下　奉／夫はならぬ　あの三郎ハ大事の囚人ちやニ依てこく屋へ押こめる　ほうひハ何成共別の物を願へ　子／扨は勅ニもいつわりか御さる　此牛盗人を訴人いたさハほう美ハ何にても其者の願ひを叶へさせらりやうとのお事なれハもし他人か訴人いたさわ親の命ハあるまい　親の命か助ケたさに子として親の悪事を訴人致て御さる　此願ひか叶わすハ親三郎か命を助ケて私を御せいばい被成て被下　ナク／シ／やれ金法師　そちハ身共か子てハない　神か仏か其様な孝行な心さしとハしらいて最前の悪口雑言はつかしい面目ない　ゆるしてくれい　是りや金法師　手を合しておかまふニも縄めのはぢによふて心斗りちや　ナク／奉／よく〳〵物を案するニ物のあわれを知らさるハ唯木石ニも事ならす　惣して慈悲ハ上より下るといへは　とかありとても親子の者はや助くるそ三郎と声の下より引たてゝ命助かる親と子ハ嬉しさも中〳〵に思わぬ程の心かなかくて伴ひ立帰り〳〵親子のちきりつきせすも富貴の家となりにけり実にありかたき孝行のいとくそ目てたかりける〳〵

アト奉行　厚板　長ヒタミレ込大口ナシウチ
ヱホシ　白ハチマキ　ヒケ　太刀　末広モツ
半上下
、子
、太郎官者　同断
、次郎官者　同断
入用　布縄　長サ壹丈斗り
かつら桶

雪打

子　是ハ門前の者て御座る　此中ハ晴間もない大雪ちや　園の木か心元ない　参つて雪を払ふと存る　誠ニ他国ハ此よふなニハないと申　当所程雪深い国は御さらぬ　イヤ是ちや　扨、、夥敷降た事ちや　先払ふ（ト言テ舞台先ヘ出て払ふ　袖ナト払仕様アリシカノ〳〵アツテ　方ニタチ手ナトイキカ）　大方よい雪を払ふ（目付柱ノ方ヘハキヤル仕方アリ）　定メて亦つもるて有う　しわらく是に居て見よふ　ふるハ〳〵　ア　なふ〳〵いそかしや〳〵　此中ハ打続て大雪ちや持木嘸つもつたて有う　先急て参ふ（ケアタミメル仕方　イロ〳〵アルエシ）　誠ニ大雪明る年ハ豊年ちやと言ふニ依てさのみ苦労ニも思わぬ　是ちや　降たり〳〵　一面に雪ちや　先払ふ（廻ル）　子　出させられたか（ト言テ払ふテイ）　ア　気毒によふ御出やつたよ　子　心元なさに雪を払に出ました　ア　夥敷雪ておりやる（ト言テハキヨセノ雪ヲ見テ）　子　此雪ハお主か）おくしたか　子　中〳〵　ア　イヤ爰な者か又しても〳〵　此様に雪をおくすと言ふ事か有物か　子　其方の地に置ともなくはせんくりに払やつたかよふ御座る　ア　某か地に有る物を余所へやつて嬉敷かろふか　子　嬉しかろうやら嬉敷かるまいやら夫を身共か知ろふよふハ　ア　惣してそちハ我か儘を言ふと有て門前て皆しからるゝよそ　子　しからハしからして置しませ　ア　人のしかるをかまうてハなけれとも此様な大

雪にハ作法か有る　子　作法とハ何とする　ア　先雪こかしをして銘〻の屋敷にきゆる迄置か作法ちや　子　夫程の事ハおれも知ておれとも手かつめたいに依てせぬ　ア　夫かわか儘と言ふ物ちや　そちか無理かおれか無利か年寄た者ニ問へ　子　何の問事かある物ちや　ア　年かさな者の言事ハあやまつて聞物ちや　子　あやまり度ハお主あやまれ　ア　イヤ爰な者か　口か有るまゝニほうりうもない事を言う　若イ者ちやニ依て堪忍する　重而おくしたらハ唯は聞かぬそ　子　聞かぬと言ふて何とする　此内シテ楽屋より出ル一ノ松ニテ雪ヲ払ふ仕方扨面白いケシキナト言テ舞台出ルアトノトコヲ見テ詞ヲカケル　早〻より御出被成ましたか　シ　雪を見に来ておりやる　子　御出被成ましたか　シ　扨〳〵そちハ気とくによふ出た　内に居て火にてもあたりハせいて　子　気遣ひさに出ました　ア　申〳〵長老様　シ　何事ちや　ア　能い所へ御出被成ました　私の地へあの者か雪をおくし升　急度被仰付て被下りませ　シ　成程尤ちや　なせにやるそいやい　子　あの地人の地に置ともなくはせんくりにはきやれと申せハ　余所へもやるまい　我か地にも置まいと言ふニ依て仕様か御座らぬ　シ　是ハそちか道理ちや　なせに掃やらぬそいやい　ア　私のいやな物か近所へやつて誰か悦ひませう　シ　夫ハさふなれ共あれハちいさい者ちや　わきまへもない程におこりやるな　ア　堪忍成ませぬ　シ　あれの親ハお主も心易ふした　殊に父はなし母親そたちちや　何事もおこりやれな　ア　長老様には御経ハ御存て有うすれとも　雪ニ付ての作法ハ御存シ御座るまい　シ　夫は知らね共子供の事ちや了簡をしてやらしませ　ア　爰ハ雪国ちやニ依て雪こかしをして我か屋敷にきゆる迄置か作法て御さる　シ　なせ雪こかしをせぬそ　子　つめとふ御座る　シ　成程尤ちや　ア　其様な我が儘を言〻升る　近所の地ハ雪かきゑ升れとも某の地ハかわく間も御座らぬ　シ　ちいさい者に勝たと言ふて誰れほめもせまい　ア　皆迄いわせられな　あれにひいきをさせらるゝ筈か有る　シ　ひいきする筈とハ何とした事ちや　ア　知るまいと思わせらるゝか　門前て知らぬ者ハ御座らぬ　シ　知らぬ者かないとハ　ア　言ふたらハはじをかゝせらりやうかの　シ　何の恥をかこうふ　あらハいへ　ア　あれか母ハせつ〳〵寺へ行ニ依てひいきをさせらるゝ　シ　あれハ後生願ひてあるかたい事を聞たかるニ依て十念杯をさつけた　そちかよふな仏とも法とも知らぬ物てハない〻やい　ア　兎角ひいきをおしやる　ト言テ笑　シ　扨〳〵悪ひやつの　己門前にハ置ぬそよ　ア　居ぬ作法な

ら居まい　己亦雪をおくしたな　子〳〵やらいて何とする物ちや　ア〳〵扨〳〵悪ひやつの　こちらからもやるそ（ト言テ両方カラ雪ハキヤル）

〳〵覚へたか〳〵（子ニ雪ヲカケルシテ見テ腹立キノトクカルテイ子雪ヲカケカヘスヲ見テ）　シ〳〵出来た〳〵（ト言テセナカナトサスルナトシテイロ〳〵仕様アリ）　女〳〵のふ腹立や〳〵　こちの子をちよふちやくする　腹立や〳〵（楽屋より女タスキガケニテ一筋袖ニ入テハシリ出ルト言テシテヲ見テ）　此方もあれを見て居ると言ふ事か有る物か　あの子ちやと言ふて余処の子てハなし手伝て雪をかけさせられいの（ト言テシテニタモトよりタスキヲ出シカケサスルシテ気毒ソウニ雪カケル此内ニアト子ヱサン〳〵雪ヲカケル）

〳〵扨〳〵悪いやつの（ト言テ子組合後ハ三人シテ雪カケルアトヨハリ）　ア〳〵最早ゆるしてくれい〳〵（ワキサヱニケ三人シテ追回スアト橋カヽリヱニケ）　此様にしてやかて寺をひらかせうそ〳〵（ニケカ）　女〳〵のふ〳〵出来させられた　嘸つめたかろう（ナト言テシテノ手エイキナトシカケタスキモトリ）　急て戻つて火をあてませうそ　ちやつと御座れ〳〵

シテ長老　無地のしめ　衣　頭巾
珠数　杖
アト男　半上下クヽル
シテニテもスル子　同断

鶏猫

国王〳〵隠岐の国の何某（カシ）て御さる　某ひそうの唐猫を持て御座るか此中何国ともなく見へぬニ依て此所の事ハ申に及はす在ゝ迄触をなし此猫の行衛を訴人する者あらハ其者の望みを叶ふと高札を上ケた　亦今日も申付ふと存る（呼出シ如常）

内ゝ知る通り猫の訴人する者あらハ望を叶ふと高札を上ケた　訴人か来たらハ此方へ申せ　太郎〳〵畏て御座る（如常ワキサニ主コシカケル）　子〳〵是ハ此国のかたハらの者て御さる　某か親は殊の外鶏かすきて御さる　何れもの申さるゝハ一切衆生のねむりをさまし其上時を知らす重宝な物ちやと有て殊の外ひそう致さるゝ　又此中何国とも知らぬ唐猫か参つて彼の

ひそうの鶏をくわへて欠け出るを親ちや者見付て側成枕を取てなけ付られたれハ一念こそ通しつこふ猫のきう所に当て即座ニ死て御さる　されとも鶏の命の失たる事をなけいて何共にか〳〵敷躰て御さる　扨又其猫ハ当国の国主ひそうの猫て御さる　見へぬ事をなけかせられ在〻迄触をなし此猫の行衛を訴人の者あらハほうひハ其者の望叶ふと高札を上けられて御座る　もし外より訴人致たらハ親ちや者は何とならりやうと存て此中ハ喰事をさえたへぬ　色〻と思案の致シ急度案し出シた事か御さる　某罷出訴人を致そうと存る　誠ニ大事の事て御座る　物毎ニしやくするニ依てかよふな事て御座る　親ちや者もあまり鶏を重宝致さる〻に仍て此様な苦〻敷い事か起た　私ハ此国の片わらに住居する者て御さる御秘蔵の猫の行衛を訴人する者ニハ望を叶ふとの御高札に付て参りました　其由申上ふ夫に待しませ　心得ました　ハア申上升ス　猫の訴人か参て御さる　何に猫の訴人か来たと言ふか　左様て御さる　急てこう通せ　心得ました其通り申上ケたれハこふ通せと被仰る〻　こふ通らしませ　心得ました　猫の訴人て御さる　汝は猫の行衛を存たか　いかにも慥に存て居り升る　夫ハとこニ有るそ　扨此事を訴人致ス者にハ何にても其者の願ひをお叶へ被成る〻と有るハ定而おまちかゑは御さり升スまいか　迚もの事に憚なから御誓言て承りたう存ます　くとい事を言ふ　弓矢八幡違ふ事てハないそ　夫ハ忝ふ存升ス　いかにも申上ませう　当町の形部三郎と申者か殺しまして御さる　汝ハ夫を慥ニ知たか　成程違ひハ御座らぬ　其者をお召被成て御尋被成ませ　尤ちや　先ツ汝は是へ寄て居よ　心得ました　太郎官者彼者を知て居るか　存て居り升　此者は聞及ふた大剛の者ちや　汝斗りてハ心元ない次郎官者をつれて急て召取て来い　畏て御さる　次郎官者〳〵　何事ちや　猫の訴人か有て知れたわいやい　夫は何者ちや　当町の形部三郎か殺した　扨〳〵夫は悪い事ちやナア　夫故汝と某とに召取て来いとある事ちや　用意をさしませ　心得た　いさ行ふそ　心得た　サア〳〵来い　心得た　きやつハ常〳〵腕たてをするニ依て悪敷〳〵と思ふたに幸ひの事ちや　汝か言ふ通り日頃にくいやつちやイヤ爰ちや　其通りちや　扨案内を乞ふて出る処を捕ふ程にぬかるな　合点ちや

（ソバ）（か）（廻ル）（事）（ト言テ案内乞ふ太郎官者出ル如常）（子ノ側ヲハナレス付居太ら中也）（後見サエ縄取ニ入ル籠物出ル）（フエサノ上ニイル）

太郎案内乞次ら後見サエクツロクシテ一ノ松へ出て　親シテ　イヤ表に案内か有る案内ハ誰そ　太　某ておりやる　シ　エイ太郎官者殿何として出させられた　太　只今来るハ別の事てない　頼みたい事か有る　こう来ておくりやれ　シ　心得た　舞座へ出ル　シカ〳〵

太　捕たそ　シテノ左ヲトル　シ　覚へハない　太　夫ならハ御前へ出て申訳をせい　次　取たそ　太　きつうしわれ〳〵御意て取に来た

覚語せい　シ　覚へハない　国　ヤイ某の秘蔵の猫を何として殺した真直に言へ　シ　思ひも寄らぬ事を承り升　曽て存ませぬ

シテスハル太郎真中二ら縄持後ロニ居ル

国　しらぬとハ言れまい慥な証拠か有る　ありよふニ言へ　シ　訴人の者ても御座る　国　悪ひやつの　訴人を出せ

太　畏て御さる　太郎子ヲツレニ行　国　弥しらぬな　シ　との様な者か御さつても存せぬ事ハいつ迄も存ませぬ

子ニシカ〳〵アツテ子出ル真中ナリ太郎座付　子　のふかくさせられそ　私か訴人て御さる　シ　ヤアあの者か訴人て御さるか　国　是てもあらそふか　シ　ハア南無三宝　扨も〳〵是悲もない　あれハ私のひとり子て御さる　あれか訴人致そうとハ夢〳〵存せなんた　最早天命に付き果てまして此上ハ包もうよふは御さらぬ　成程私か殺しまして御さる　いか様ニも御せいはい被成て被下　子ニムカイ　ヤイそこな者（ヤツ）　扨〳〵悪ひやつちやナア　誠ニうみおとさるゝより不便ニ思ふて透間の風ニも当らぬ様ニそたて上ケ後〻ハ己に懸り世を楽（ラク）〳〵とおくろうとおもふてナア年の寄をもわすれ大きう成れかし〳〵と朝夕神仏にきせいを懸ケ息才な様にと祈る（イノル）親の恩を忘れて此一大事を訴人する　子てハなふてかたきちや　あの様な者を見るも腹か立一時も早う御せいはい被成ませ　国　扨猫わ何として殺した　シ　されハ其事て御さる　此方の御秘蔵被成る〻猫にまして私も秘蔵の鶏の（か）御さる　此中何国とも知らぬ唐猫か参つて彼の鶏を引くわへ欠け出るをそはなる枕を追取り投付て御されハ猫の運こそ尽つろう　きう所に当て即座ニ死て御さる　其儘表の畑に埋めて御さるか見る人も御さらす知る〻事ハ御さるまいと存てちんじて御さるか此上ハせひもない　いか様とも御せいばい被成て被下　忰を敵と存すれハ能ふ御さる　そつとも御うらみにハ存ませぬ　急て御せいはい被成ませ　国　思へは〳〵腹の立　是ゑ引出せ　せいはいする　子　申〳〵先御待ち被成ませ　国　シカ〳〵　子　此事を訴人するならハ望を叶ふと有る事てハ御さらぬか　望みをお叶へ被成て其後御せいはい被成ませ　国　是ハ尤ちやあれハ汝か為にハ何ちや　子　其事て御さ

る　あれは私の親て御さる　此事をよそなから聞へたらは定而御せいばい被成りやうと存て子として親の訴人を致して御さる　あの者の命を被下たらハ難有ふ存ませう　ナク　国　イヤ〳〵夫ハならぬ　あの者をせいはいせうと思ふての事なれ　夫ハならぬ　外の望みを言へ　子　私の願ひは外ニハ御さらぬ　あの者の命か望て御さる　とうそ御助被成て被下　国　イヤ〳〵夫ハならぬ事ちや　子　御助被成ねハ国主ともあらふする御方の偽りを被仰るゝニにまして御さる是悲共御助け被成ねハ私共に御せいはい被成て被下　ナク　国　是は道理につまつた　何そ左様のためしはし有か子　如何ニも御さる　国　夫ならハ語てきかせい　子　畏て御さる　語り　昔シ唐こしけいやう国の民大病をうけやまいにふしけるか羊を服し直ると夢に見て帝の羊を盗み取て服しけれハたちまち病平癒す　帝逆鱗有て高札を上ケ羊の行衛をそふもんする者あらハ群功に望み叶んとありけれハ件の羊を盗みたる者の子訴人す　其群功に親の命を申請助りたるためしあり　私も其事を思ひ出しての事て御さる　是悲共命を御助け被成て被下さるゝならハ難有ふ存ませう　ナク　国　是ハ尤ちや　余りの道理に物な申せそ　然も今年は我親の　色　十三年に当りたり　咎有りとても助るそ　早や〳〵つれて帰るへし　縄をとけ〳〵　謡　シ　ありかたの御事や〳〵　子　親の命を申請　同音　親子諸共打つれて悦ひいさみ帰りけり〳〵　シ　のう〳〵其方ハ子なからも命の親ちや　ちやつとおわれさしませ　ト子ヲウナリ

謡返しより子同音親の命ヲ申請ノ時両人シキスル仕方立テ一ヘン廻り留ル子ノ手ヲ引入モヨシ工夫第一ナリ

アト国主　土ヱホシアハセヒタミレ　大口　太刀
シテ親　大モンニテモナシウチ白ハチマキ　羽織　半下上帯
シテニテモ子　半上下又ハテン中羽織ニテモ
アト太郎官者
同　次郎官者　如常　アサ縄壹丈斗り

連箸

目代アト〳〵当所の目代て御座る（如常高札）　女〳〵童ハ此辺りにかちんを商ふ者て御さる（鍋八ツはちの通り言ナリ）　誠ニつレ合の参らいて叶わぬ事なれとも宿て商売を致さるゝニ依て童か参る事て御さる　シテ〳〵是ハ此辺りにけんふを商売ふ者て御さる（鍋八ツはちノトヲリ少シ言様アルヘシ如常タナカサルネルシカ〳〵女ヲキテ）　女〳〵ヤイ〳〵やいこゝな者（ト言テ如常ノタナカサル打シカ〳〵）　シ〳〵かしましい何事ちや　女〳〵何事とハ童か棚の先になせ居るそ　のけ　シ〳〵跡から来てのけと言ふ事かある物か　のき度ハ己のけ　女〳〵のかぬか〳〵　シ〳〵扨〳〵わゝしひ女かある　とふ有てものく事ハならぬ　女〳〵ヱイ腹立や〳〵のくまいか〳〵（カフリツク）　シ〳〵是ハ何とする　女〳〵誰もないか出合へ〳〵　ア〳〵何事ちや〳〵　女〳〵こなたも聞て被下　此処御福貴に付て市数多ある中に重て新市をお立被成て壹の棚をかさつた者ニハ市司を仰付らるゝとのお事てハ御さらぬか　ア〳〵中〳〵其通りちや　女〳〵夫故童かとふに参て一の棚をかさりましたれハあの者か跡から参つて童か棚の先にいまするニ依てのけと申せハのくまいと申升　急度被仰付て被下　ア〳〵心得た　ヤイ〳〵目出度市始に何事をあらそふそ　シ〳〵されハの事て御さる　此所御福貴ニ付て市数多ある上に重て新市をお立被成何者ニハよるまい早〻参り一ノ棚をかさつた者ニハ永代万そうくしを御しやめん被成市司を下さらう（りやう）とある故私か一の棚をかさりましたれハ跡から参つて私か先ニ居て退まいと申のけと申せハわゝりつき升　あのようふな者ニハ急度仰付られて被下　ア〳〵すれハ汝か早いか　シ〳〵左様て御さる　ア〳〵ヤイ〳〵あれか早いといふ　女〳〵のふ腹立や〳〵　こちの人かわせたらハあのよふな事ハいわせ升まい　よし前後の事ハおかせられ惣してかちんといふ物ハ年の始から年の暮迄五節句の御祝儀と御されハかちんか出いて叶わぬ　何そやある絹切れや布切れて御祝儀かあった例か御座らぬ　あの様な者ハ市末に被仰付れ　ア〳〵シカ〳〵　シ〳〵成程御祝儀に餅も出升か又絹布ハ四季の衣替へと申て入升る　其上冬なとに成りましたらハ身をあたゝかにして御祝儀もお祝いも餅もかち

んもいり升まい　ア　是も尤ちや　今のを聞いたか　女　如何ニも聞〻ました　夫ハまに立た絹て御さる　あれかしふ紙包みにハ頭巾の切れや足袋のひもならてハ御座るまい　シ　ヤイそこなやつ　女　何しや　シ　己か其少さい桶の中にある餅て何と御祝儀かなる物ちや　女　宿にハ大分有る　シ　某も内にハいか様な絹布もある　女　何の有う　シ　のふて成物か　ア　ヤイ〳〵たかいにあらそひハ無用ちや　女　其上昔からもちも哥にもよまれました　シカ〳〵　女　哥　ア　ヤイ〳〵汝も何そあるか　シ　身共わ猶を御さる　哥　ア　是て ハ済ぬに依て何そ勝負ニせい　シ　夫ならハ私ハ角力を取りませう　ア　是ハよからう勝負にせいといへハあれハ角力を取らふといふか其方も取るか　女　男と女と何の角力か成ませう　ア　夫ならハ川立はなるまいか　女　女かいつ川を渡た事か御座る　ア　木のほりハならぬか　女　見苦敷い木のほりか何となる物て御さらう　ア　扨〳〵気の毒ちや　女　下ニ居てちよつとする勝負ならハしませう　ア　夫ならハうておしすねおしか　女　イヤ思ひ出しました　足おし致ませう　ア　足押かならうか　女　つレ合の名代に方〳〵懸あるき升ニ依て足ハ達者て御座る　足押に致そうと言ふて下され　ア　心得た　のう〳〵足押をせうといふ　シ　扨〳〵大ちやくな事を申升　是ハ申まてもない某か勝て御さる　女に勝たと申て手柄にハ成ませぬ　是ハよしに致ませう　ア　夫てハ知れぬ是悲共あしをしをせい　シ　夫ならハ是へ出よと仰られ　ア　心得たさあ〳〵是へおてやれ　女　心得ました　シ　己ハ大ちやくなやつちやナァ　女　そちハ盗人ちや　シ　おれか何を盗んた　女　童か棚を盗んたちやないか　シ　そちか盗んた　ア　さあ〳〵論をせすとも勝負をせひ（シカ〳〵アシヲシスル）　シ　見事勝負にかつか（女右ノ足ニテヲスカツナリ後男足ヲフミコム）　シ　勝たそ〳〵　女　のふ腹立や〳〵　ア　何事ちや〳〵　女　今のを見させられなんたか　童か勝ましたれともはたへ足をふみこみました　あの様な者ハ急度仰付て下され　ア　心得た　今のよふなりやうしな事をする物か　シ　私か足かつよさにちよつとさわつた物て御さらふ　勝負には私か勝ました　女　のう〳〵それならハ相撲を一番とろうといふて被下　ア　そちハ最前角力ハいやちやといふたてハないか　女　あの者のちからも知れました　とうあらふとも取りませう　ア　心得た　ヤイ〳〵角力を取ふと言ふ　シ　扨〳〵大ちやくな女て御さる　夫ならハ是へ出よといふて被下　ア　心得た　さあ〳〵あれへお出やれ（女タスキカケテ出ルナリ）　ア　某か行司

をせう　シ夫ハ慮外で御さる　女お頼み申升　ア〻ヲテ（スモウ 如常）　女そちにまけよふか真こうして置たかよい
覚へたか〳〵　タミク　シア、ヤイ〳〵角力ハ一番てハしれぬモ壹番とらう　女勝たそ〳〵

シテ　半上下
女　如常
アト　長上下

蜘盗人

シテ是は此辺りの者て御さる　近日連歌の当に当ツてハ御座れとも手前えならねハ此当のいとなみよふか御さらぬ
又爰に誰殿と申て有徳な人か御さる　今夜忍ひ入何成共道具を一色二色案内無ニかつて参つて当を勤ふと存る
（此内シカ〳〵　万事連哥盗人同断　道具見ル内ニアト出ルシカ〳〵）　アトやい〳〵　シテハア（笛座エニケル追廻シ正面江ニケル作り物ノ中江入蜘の巣ニカミリタルテイニテモガク）　シ先お待被成〳〵　ア
待とハ何と　シ蜘の巣にかゝつてうこかれませぬ　ア扨〳〵うろたへたやつちや蜘の巣に懸る人かある者か　シ
左様仰られな　古しへの哥にも蜘の巣にあれたる駒ハつなくともふた道かくる人わたのましと申せハ人も蜘の巣にかゝ
るまい物ても御座らぬ　ア扨〳〵やさしい事をいふ　それならハ某か歌の上の句をよもう程ニ下の句を早束つけさし
ませ　命を助ケてやろふそ　シ夫ハ忝ふ存升か私ハ得よみ升まい　ア〻イヤ〳〵口のよい人ちや　こふもあらうか
シ早や出させられましたか　ア蜘の巣にくゞるやさしき盗人を　シしたり〳〵扨も〳〵面白い事て御さり升
アさあ〳〵下の句を早う承らう　シこふも御さりませうか　ア何とておりやる　シきるもきられすさゝかにの

糸　ア　扨〳〵一段と出来た　其様なやさしい人とハしらなんた　命をたすくるそ　シ　夫ハ忝ふ御さる　ア　さあ〳〵急て出さしませ　シ　このよふに蜘の巣に懸て出られませぬ慮外なからちと巣をおとり被成て被下　ア　心得た　太刀ニテ巣ヲヤフルシテ悦フ出てカエルアト留テ酒ヲ呑セル連哥盗人同断小袖ヤルシカ〳〵　シ　夫一生や誠やかゝる一木の影にかくしに大きな蜘の巣にかゝりあらわれし某古哥を引しいとくにやそのつみをゆるされ酒壹ツ給り御肴迚小袖きるきられぬ言の葉の盗人におひとするといふしそ（ママ）誠なりけれ〳〵　のふ〳〵嬉しや先急て帰へらうハア又蜘の巣かある

盗人　半上下
主　長上下
作り物　土蜘のことく作り　脇座ニヲナリ

連歌十徳

亭主アト　此辺りの者て御座る　某親の追善の為連哥師を抱うと存る　存生の時分殊外連歌を好て御さるニ依て連哥十徳相伝の御出家ならハ当分拾貫の施物を出しいよ〳〵相伝の儀たゝしい者ならハ永ゝ扶持を致そふと存る　先此由高札を打ふ　シテ柱に打ナリ笛サニ居ル　女　のふ腹立や〳〵　棒ニテシテヲ追出ル　シテ　是ハ何とする〳〵　女　己棒て打殺すそ　シ　己ハ心安そふに亦しても〳〵棒を持て打殺のたゝき殺のといふか男に向ふて何の咎て其様にぬかしおる　女　人聞よい見事男ちやといふ事を知て居るか　シ　知ふとしるまいと身共か女てハなし男ちやか何とした　女　また其様に言度い儘をぬかしおる　よふ合点して見よ己か心に覚へか有ふ　シ　何も覚へハない　女　忘れまい事を忘れたナア　誠に童か嫁入をした時は四季の小袖数ゝ十二の手道具月ハタ日機迄持て来たそよ　シ　夫か何とした　女　先跡を聞おれ　いつその

程から当りの徒ら者と寄合て手慰をしおるに仍て成柄もわるう成りおけといふて人を頼み□を持て色〳〵異見のすれ共聞おらいて金銀はいふニ及す田山家才童か一ツせきまて打込ふて今ハ朝夕の煙さへたへ〳〵に成たてハないか　夫ても根生か直らいてうか〳〵と朝寝斗りしおつてたま〳〵起て隣辺りへ行て鍋釜の下さへもゆれハむりにいちかつて居て何そ喰ねハ戻らぬ様にしおる　己夫ハはしてハないか〳〵兎角いけて置ニ依てちや　最はや打殺す程に覚語せい

シ　成程身共か悪ひ皆そちか尤ちや道理ちや　去なからおれを殺してそちハとふする　女　己を打殺してその跡て童も死ぬる　シ　扨はそちも死るか　女　ヲヽ扨いきてハ居ぬ　シ　尤ちや迚も死ぬるならハ先おれより先へ死てくれい　女　のふ腹立や〳〵　また其つれをぬかしおるあの恥しらす　シ　成程あやまつた　此上ハ心を直て一トかせきしよふ程に此度ハ了簡してくれい　女　毎も其様にいふてもうか〳〵として居るてハないか　シ　此度斗りハうそてハない今すぐに談合ニ行ふ　女　夫ならハ今直に談合して来い　さなくハ内江は寄せぬそ　シ　気遣いするな　立身して見しよふ　女　うろたへて居す共早ふ行ケ　のふ〳〵腹立や〳〵　女入ル　シ　是は如何な事　あの躰ならハ内へハ寄せぬて有ふ　何とした物て有ふそ　イヤ寺のお住持様か思案深い人ちや　あれへ参て相談をして見よふ　何れ女共か申も道理ちや　何事も身共か悪ひ　兎角寺のお坊に思案して貰ふて渡世の分別を極ふ　是ちや　案内乞ふ如常シカ〳〵坊主出ル　シ　近頃お前の思召も恥敷う御座れ共誰有て相談致す者も御さらいて亦参りました　兎角身の上不勝手ニ成ましてとふも成ませぬ渕川江身を投て成とも死ませうかと存て御暇乞ニ参つて御さる　妻子の事も頼み升　亦私か跡をも弔らわせられて被下

長老　扨も〳〵しやうしな事かな　節ゝ身代か成らぬといふてそふ相談におりやるニ依て鳥目を合力いたし亦八木抔も遣わした事もあれ共其甲斐もない　人を弔ふハ出家の役ちや　若シお死にやつたらハ懇に法事をして回向せう程に兎角念仏を忘れぬよふにめされ　シ　されハそこて御さる　私の命ハおしみませね共人を助けさせらるゝハ御出家の役て御さる　聞のかしに被成てハ御一分か立ますまい　長老　笑　お死にやらいてのちとおたしなみやれ其様なむさとした事をおしやつても中〳〵おどろく事てハない　人をなふらすともおかしませ　シ　全く左様てハ御さらね共有様ハ跡へも先へも参りませぬ　とふそ宜敷く頼み升る　長老　にか〳〵敷い事ちや何そ細工抔ハ仕覚へた事もないか　シ　惣して

細工ハいつこう不調法ニ御さる　長老〃連歌ハ成らぬか　シ〃案する内にねむりか出まする　長老〃せめて出家なれハ思ひ寄た事もあれ共　シ〃夫はとふした事て御さる　長老〃辺り近ひ所に有徳な人か有て親の追善の為連歌師を抱へさせらるゝ　連歌十徳相伝の出家ならハ十貫の布施物を出し其上相伝之儀正敷は永〻扶持せうと高札を上られた　わこりよか坊主なれハ連歌ハ得せすとも思案もあれとも俗ちやニ依てとふも成らぬ　シ〃イヤ夫ハ耳よりな事て御さる　拾貫といふ布施を取る事ならハ坊主に成とも何になりとも成ませう　先御思案の程を御聞せ被成て被下　長老〃爰に古い十徳か有　是を其方にやろう程に彼の十徳を着さして往て連歌十徳相伝の事を尋ねらるゝならハわこりよハ口調法な人ちやニ依て何成共へんこうに任せていふて見て仕をふせたらハ永〻扶持を得る　若シ不首尾ならハ言〻ぬけて戻たかよい　何れにも十貫文の布施を取さへすれハよいか何と有ふ　シ〃扨も〳〵よい事を承りました　何と申ても覚へた職（シヨク）ハなシ亦うそを言ふてハ当座の間に合する様な事は私の得物て御さる　すくに是から参りませう　御苦労なからあたまをお剃り被成て被下　長老〃イヤ剃髪召さるゝ事ハ先御帰りやつて一門衆ともお内儀とも相談めされて其上の事にめされシ〃夫ハお心安ふ思召ませ　身しよう不如意ニ付女共ニも一門中とも兼〻相談いたして髪を剃事ハ扨置み〻鼻をはいて成とも露命をつなくよふに相談を極て置ました　御気遣ひのふ早〻お剃（ソリ）被成て被下　長老〃其様に相談も極て有ならハ成程剃てやらふか乍去人並〳〵勝れてわゝ敷いお内儀なり自然分別か替るまい物てもない最一度とくと相談めされシ〃イヤ今朝も相談いたしたれハ御寺へ参てお長老様を頼まして坊主になれと申てせかみ升る　是悲共お剃被成て被下　長老〃其様に念を入た事ならハ成程剃てやろう　こちへ寄らしませ（笛サニテカタトリ頭巾着セル）　シ〃扨〳〵御手のかるい事かな　長老〃剃よいつむりちや　シ〃よふ御座り升るか　長老〃殊の外能ふ似合た　シ〃扨もつむりかかるう成りました　長老〃サア〳〵此十徳を着さしませ　シ〃是ハ忝ふ御さる　連歌十徳ちやと申て取つくろうて扶持を得ませう　長老〃随分仕合を召れ　シ〃御かけて取（ママ）手に取つきました布施を貰ひましたらハおすそ分ケを致しませう　長老〃夫ニハ及ハぬ往ておりやれ（暇乞如常）　シ〃のふ〳〵嬉敷や急て参ふ　誠ニ天道人を殺さスと申か此事て御座る　天晴御調法を持て手柄を致て帰う　イヤ是に高札か有る爰て有う　先此高札ハ某か引て懐中致そう（案内乞ふアト如常出ル）　シ〃高札の表に付て参

た者て御さる　亭　高札ニハ連歌十徳相伝の御出家と記して御さるか左様て御さるか　シ　おそらくは日の下に於て相伝致したハ愚僧一人て御さる　亭　よふこそ出させられたれ　先こふ御通り被成ませ　シ　心得ました

アトカツラ桶ノフタヲ持出ルシテノ前ニヲクナリ

シ　是はお盃を被下りよふやら菓子にこんふか出ました　亭　イヤ菓子てハ御さらぬ　是ハ則高札の通り昆布十巻進上致しまする　シ　扨は高札に十貫の布施と有ハ昆布十巻の事か　亭　中〳〵　シ　私は帰りませう　亭　是ハ何とて御さる　シ　昆布ならハ昆布と書いて置たか能ふ御さる　此大切な相伝をこんふつれニ何んと成る物て御座らふ　鳥目かと思ふてはる〳〵来ました　亭　成程尤て御さる　品に依て鳥目成り共進しませう　先相伝の品を被仰い　シ　イヤ〳〵其様にまきらわしき事てハ大事を明す事ハ成りませぬ　兎角帰りませう　亭　夫はお情のふ御さる与風御出被成て被下るゝ社幸なれ　御相伝の程を承わらぬ先にハ返しませぬ　引留ル　シ　のふ〳〵大事の連歌十徳かやふれ升る　亭　何に是か連歌十徳ちや　シ　衣のことく羽織のことくニツ合て十徳殊更是は連歌相伝の根本て是をやふつてハ替りか御さらぬ　亭　ヤイそこなまいす坊主連歌十徳といふは此道連歌の大事ニ十ヲ徳有りといふ事を相伝して宗匠をすることを賞翫（ショウカン）なれ　何そや其古イやふれ衣か連歌十徳て有ふ事ハ　シ　扨ハ十ヲの徳といふ事か　亭　おんてもない事　シ　南無三宝鳥目かと思へは昆布の事なり　十徳かと思へハ十ヲの徳成り　此よふに違ふてハ何程違ふも知れませぬ　亭　アノまいす坊主め　追廻シ如常入ナリ

男　半上下
女　如常
長老　衣角頭巾中啓珠数
亭主　長上下
入用　棒　コヲシ十徳

柱杖

シテ　是ハ諸国一見の者て御さる　此度初て都へ登り爰かしこ見物致た　先登た印に柱杖を求て参ふと存てあつらへて置た　定而出来てあらふ　取に参ふと存る　誠ニ出家程心易い者ハない衣一巻珠数壹れん持てハ何方へも参らるゝ事ちや　イヤ是ちや物申案内申　アト　表に案内かある案内ハ誰そ　シ　愚僧て御さる　ア　エイ御坊様御出被成ましたか　シ　あつらへて置た柱杖ハ出来ましたか　ア　中〳〵出来ました先こふ御通り被成　シ　心得た　ア　さらハ是て御さる　シ　ハア是ハ殊外麁相ニ御座るのふ　ア　イヤ〳〵麁相ニハ御さらぬ随分念を入ました　シ　何に程おしやつても麁相に御さる　ア　御僧江一句持て参ふ　シ　何とて御さる　ア　如何成か是白木の柱杖　シ　うるしなけれハ得ぬらすして（ト言テ鼻ヲナスル）　ア　ムウ花ぬりに遊したよ　其柱杖おれての後ハ　ア　ちからなく取ての後ハいかに　シ　一念ハつくとも二念はつかし　ア　扨〳〵こなたの様な御僧は有まい　一飯の申そう　こふ御通り被成　シ　左右あらハ兎も角もて御さる　ア　ヤイ〳〵御僧を申入た　一飯を栫へ候得い　エイ扨此方へちと御無心か御さる　シ　何事て御座る　ア　此方の様な御出家かあらハ御剃刀をいたゝいて御弟子に成て諸国をめくりたいと存ました　幸の事て御さる御剃刀をあてゝ被下　シ　思ひも寄らぬ事を被仰るゝ　親類衆とも相談めされ　ア　親類とも常〻相談いたして置ました　とふそ剃て被下　シ　夫ならハ御内儀も有う　御内儀とも相談させられい　女共ハ常〻私か後生を願へハ我〻か後生ニも成る早ふ出家をせい抔とすゝめ升る　シ　夫ならハさつと済た　兎も角もさしませ　ア　夫ならは何卒只今御剃刀かいたゝきとふ存升る　シ　いかにも心得た　其用意をさせられい

アト肩トリ太鼓鞁サニテ用意ヲシ舞サ真中ヘ出ル　シテ後より前へ廻りカウシキセル　是より追込迄呂連ノ通り　六義少シモ相違なし　十徳着セル斗り名付ル事ナシ

シテ　出家　　無地のしめ　白むく衣　角頭巾
　　扇竹ニハサシ持　剃刀
アト　亭　　半上下
〃　女　　如常

右は呂連の通也　尤名付ル事なきゆえ十徳着ると直に女出ルかよし　六義三人ニ成て相違なし

解題

〈茸〉（くさびら）の場合

今回の『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題十二　をもって『和泉流秘書』七冊（うち一冊欠）の翻刻は終わる。『和泉流秘書』が書写者、書写年代等一切記さない狂言本で、実は素性もわからないものであった。図書館の記録によれば昭和三十八年十一月七日某古書店からかなりの高額で購入されていた。その時点ですでに四冊目は欠冊であった。七冊のうち一冊を失っていたとはいえ、この高額な購入を決断した理由は、百二十七曲の多数曲をまとめて所収するものであり、狂言和泉流の台本としての価値を認めてのものであったことがわかる。

さてこの狂言本の成立時期及び台本としての位置を明らかにしようと、解説（島津忠夫・野崎典子編『和泉流狂言選』和泉書院）に「波形本よりも後、雲形本と同時代か或いは少し前のものかと推定」し、それを更にすすめたものが『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題二の「解題〈棒縛り〉の場合」である。それによれば、

『和泉流秘書』は狂言和泉流山脇の家元系の狂言台本であること。『和泉流秘書』は『波形本』に靡くことなく『波

形本」よりも『雲形本』との関わりの方が強い。又『元喬本』と『和泉流秘書』とは直接的には関わらない位置にあったらしく、『元喬本』とは異なる別の位置付けがなされてきたものではないか。そして『雲形本』が元業の手によって書かれる前段階において大きく影響を及ぼした狂言台本であった。

と結論づけた。

天理本	波形本	和泉流秘書（県大本）	型付本	雲形本
アタリノ者ト云、それかしのしゆへき、当年初而何共しれぬくさひらかはへた、たひ〳〵とってすつれとも、夜のまにはえ〳〵幾度とつても又もとのことくにはへるかやうのふしきな事ハ御さなひ、又爰にお目にかけらるゝ法力のつよい山伏の御さある、是をたのふて、きたうをして見うと云テ行	此あたりの者でござる某しゆへきに当年ハ初而何ともしれぬ茸がはゆるたび〳〵とつてすつれ共夜の間にハはへ〳〵致して又本のやうにはゆるかやうのふしぎな事ハござらぬ又爰にお目かけらるゝ法力のつよいお山伏がござる是へまいてよい事かわるい事か承ハらうと存ル	是ハ此辺りの者て御座る某の屋敷に当年ハ始めて茸か出来て御座る内〻の念願て御座ったニ此様ナ嬉敷事ハ御さらぬ爰に御念ころなお山伏か御座る程ニ是をお頼ミ申弥茸の栄へるよふニ加持を致て貰ふと存る	名乗テ某か屋敷へ当年始て茸か出来たト言内〻願ひて有たに此様な悦敷事ハ無又爰に御念比なお山伏か有今日ハ参りお頼申弥栄る様に加持を致て貰ふト言	是は此あたりの者でござる。某の四壁に。当年始而何共知れぬ茸がはえてござる。度〳〵取てすつれども。夜の間にはえ。夜の間にはは え。幾度取ても所もかへす。又もとのごとくはゆる。か様のふしぎな事ハござらぬ。又あたり近い所に。行力のつよいお山伏が有。是をお頼申。一加持致してもらはうと存る。

右は和泉流狂言台本の五本を〈茸〉の名乗り部分について比較校合したものであるが、傍線を施したように「天理本」「波形本」「雲形本」は、「何共知れぬ茸」を「かやうのふしぎな事ハござらぬ」というのに対して、「和泉流秘書」と「型付本」は心でひそかに願っていたことで「此様な嬉敷（悦敷）事ハ御さらぬ」と茸の生えることをよろこんでいる。

くさひらのはへる事はある物なれとも其ことくにあとからはへるは不審な事しやと云されは私もたゝ事では御さるまひと存るによつて慮外なからかやうに申上る事しや…… 扨々是は大きいくさひらしやと云う今まて此やうな事は見た事もきいた事もないろくな事てはあるまひと存て気遣仕ると云いや〳〵心安おもわしませ一祈いのつていのりけしておまらせう	茸といふ物は雨つゞきかよふてしめりがよけれハ出まじい所にも出る物じゃわるい事でハ有まいぞ左様にござれハよふござるが乍去あまり大きい茸でござるによって夫ゆへ不審に存まする　大きいと云てどれ程有ぞ人ほどござります　なんじゃ人ほど有先ハがてんの行ぬ事じや…… 乍去わるい事なりともよいよふに一加持してんじかへておまそう	何卒御出被成て弥出来まするよふに一加持被成て被下りやうならハ忝ふ存升重畳な事ちや…… 某かいたらハ夥敷う出来るよふニ加持をしてやらふそ	何とそ此方お出被成て弥栄る様に一加持被成て被下ふ成ハ忝いト言夫は重畳の事しや…… 茸の出来ると言ハお主のはんしやうする随相しや某か行て一加持仕たらハ夥敷栄るて有ふそ	茸のはゆる事はある物なれども其ごとくに跡からはゆるは不審な事ぢや左様でござる夫故私もたゞ事てはござるまいと存るに依て慮外ながらか様に申上る事でござる…… 如何様是は大い茸ぢや某も是迄色〻茸もみたが此様な大い茸ハ今が見始ぢやハア何やら気味のわるい事でござる…… ろくな事ではござるまいと存て心元なう存る事でござるいや〳〵気

遣ひなめされそ一いのりいのつていのりけしてやらうぞ

茸が生えることはよくあることだが、抜いても抜いても次から次へ生えるのを不審に思い、「たゞ事ではござるまい」「ろくな事ではあるまいひ」と山伏に祈祷を頼み、「一いのり祈つて（一加持して）いのりけして（てんじかへて）」貰うことを期待するのは『天理本』『波形本』『雲形本』であり、屋敷に茸が生えることを喜び、ますますいっそう生えるようにと祈祷を頼み「夥敷う」生えるだろうと山伏が約束するのは『和泉流秘書』と『型付本』である。茸の生えることを喜ばしく繁盛の瑞相とみるのと嫌悪するのと正反対の様相を呈する。

山伏の祈祷によって（祈祷にもかかわらず）次々と茸が生える。「松茸」は全ての台本において必ず最初に登場する「くさびら」であるが、あとは「椎茸」「平茸」「霊芝」「姫茸」「紅茸」「鬼茸」など舞台上を動きまわる。曲の最後の留めを「シヤキリニ乗テ跡ヨリ先へ楽ヤへ入ル」と、シヤギリ留めを明記するのは『型付本』で、ぼうろんぼろうの祈りの「内ニ茸ウコキ出シ山伏ニヒツ、クアトヱモヨル祈〳〵入ルナリ色〻シカ〳〵アリ」とシヤギリ留めを許容しているのは『和泉流秘書』である。このシヤギリ留めは、大蔵流祖本の『虎明本』も「しやぎりにているなり」とし、和泉流祖本の『天理本』の「山伏あそこ爰をいのる内にくさひら立とシヤギリに成一へんまはりくさひら上面にならふ二人は拍子の前にいて留る也又シヤキリの内山伏とアトは入茸斗ならひて留るものあり」に倣ったものであって、『雲形本』に記す「昔ノ留ハシヤギリニテ色〻ノ留アレトモ是ハ古躰ニテ近躰ニハイカゞ猶心得アルベシ」という元業の見解としては、昔の留めはシヤギリ留めであるがこれは古躰であるから今の留めとしてはどうであろうか、と疑問を投げかけ、現に「ゆるしてくれい〳〵、何とする、ゆるしてくれい〳〵、ト云て、逃入ヲ、茸、無言ニテ、追入也」と追込みで留

めている。

先に見たように和泉流五台本のうち茸を嫌がるものが『天理本』『波形本』『雲形本』の三本、茸の生えることを喜ぶものが、『和泉流秘書』『型付本』の二本であった。この二本は、従来の茸を嫌がるものを逆に喜ばしいものに趣向を変えておもしろみを工夫したのであるが、従来のものも替りの仕様として残したのである。次に示す。

和泉流秘書（県大本）	型付本
同仕替 ア〳〵是ハ此辺りの者て御座る某屋敷に当年始メて何ともしれぬ茸か出来て御さるニ依てひた物取て捨れ共所をも替へす夜の間に出来るか様な不思儀な事ハ御さらぬ夫ニ付て爰に法力のつよいお山伏か有る是をお頼み申祈祷を致て見ようと存る誠に御先達の御出被成たらハ定而様子か知るゝて御さろう何卒お宿に御されハよいかイヤ何かと言ふ内に是ちや先案内を乞ふ　前ノ六儀ト同断　何の為来たト言　ア〳〵只今参る別の事ても御さらぬ私の屋敷に当年始メて何とも知れぬ大きな茸か生へまして御さるひた物取て捨れ共所もかゑす夜の間に出来升るあまり不思儀に存升るニ依て此方をお頼み申一加持致て貰ふと存て参りました何卒御出被成て被下りやうならハ忝ふ存しませう　シテ〳〵扨〳〵其様な事ハ知らなんた茸の生る事ハ有る物なれ共其	又茸ヲイヤカル仕様モ有左之通 〳〵名乗テ某か屋敷へ当年始て何共しれぬくさひらか出来たか取て捨れ共夜の間ニはへ幾度取ても又元の如くにはゆるか様な不思義な事ハ無何とやら心掛なト言又爰に御念比ヲ言是へ参りお願申一加持致て貰ふト言テ廻ル大木抔の朽ちた跡又ハ山中抔にはゆるハ珍らしからぬ事成共人の屋敷にあの様な茸の出来るハふしきト言何角トヲ言是ヨリ前之通也 〳〵今日参るハヲ言名乗ノ通言取て捨ますれ共よの間には何共しれぬ大きなくさひらかはゆるト言何とやら心掛ト言何とそ此方お出被成御覧して一かち被成てヲ言 〳〵此中ハ別経の子細ヲ言是ヨリ前段の通 〳〵案内の為汝から行〳〵私からト言アトヨリ先へ二人廻ル今日ハ此方お出被成て被下て忝いト言

如く又しても〳〵生ると言ふハ不思儀な事ちや乍去此間は別行の子細有て何方へも行かね共其方の事ちや程に往ておましよふそ　ア〳〵夫ハ近頃忝ふ存升スそうあらハイサお出被成ませ　シ〳〵案内の為め其方からお行きやれ　ア〳〵左様ならハ私から参りませう　シ〳〵一段とよかろふ　ア〳〵さあ〳〵御出被成ませ　シ〳〵心得た　ア〳〵誠に今日ハお出被成て被下て忝ふ存升る　シ〳〵身共かいたらハ定メ而様子か知るゝて有う　ア〳〵イヤ何角と言ふ内に是て御さる　シ〳〵誠ニ是れちや　ア〳〵先こふ御通り被成ませ　シ〳〵心得た（イリチカイワキサエ行アトシテ柱へ行）　シ〳〵扨咄の茸ハとれに有るそ　ア〳〵是に御さり升ス　シ〳〵ハヽアすさましい茸ちや是ハ松茸ておりやる　ア〳〵余り大きう御座るニ依て松茸とハ存ませなんた　シ〳〵扨是迄此よふな物の生へた事ハおりないか　ア〳〵ついに承り及ませぬ当年始メて御座る何卒一加持被成て被下ふならハ忝ふ存ませう　シ〳〵気遣ひおしやるな一祈いのつて忽祈けしてやろうふそ　ア〳〵夫ハ忝ふ存升る　〳〵前ノ同断　ア〳〵ハヽアうこき升る　シ〳〵追付祈けしてやらふそ　ア〳〵忝ふ存升る（イノル茸アトノソハエ出ル）　ア〳〵ハア申又是へ出ました　シ〳〵誠ニそれへも出た是ハ椎たけそふな最一祈いのりけしてや

〳〵身共か行て一加持したらハ忽茸か消るて有ふそ　〳〵シカ〳〵何角言内ヲ言シテワキ正面へ出ルアト左ノ方ニ立茸ワキサへ出ル　〳〵とれにト言　〳〵此茸ト言　〳〵何れ是は何共しれぬ茸しやとれ〳〵追付祈てやらふ　〳〵シカ〳〵　〳〵夫山伏と言ハヲ言祈ル間ニ紅茸目付へ出ル　〳〵申夫へ出たト言　〳〵誠に是へ出たハヽアしほら敷茸しや是ハ定て紅茸と言のて有ふ　〳〵何とそお頼申ト言　〳〵心得た〳〵フシいろはの文にて祈る成ハ。なとかちりぬるをわかなれほろをんトイノル此間ニ三人程シテ柱へ出ル是ハいかな事爰へも出ておりやるハ　〳〵又出た是は何ト言　〳〵平茸の様な物しや　〳〵気毒ト言此方をお頼申たれハ様〻の茸かはへて迷惑ト言　〳〵気遣ひおしやるな出かけて居るたけハ皆出して置て忽に祈りけす事ておりやる　〳〵シカ〳〵　〳〵追付奇特を見せうフシ重ねて数珠を押もんてほろをんト祈ル初ニフタイノ茸ヲ祈り又一ノ松へ行テ祈ル間ニ楽ヤヨリ茸大勢出ル初ニ傘ノ茸出テ前段ノ通ニスルシテ驚キフタイへニケテ行なふあれへも珍敷出た一にこんからヲ言一ノ松へ行テ祈ルト橋掛り茸シテヲ追テフタイへ入シテ真中へニケルト惣茸シテノソハヘヨリテシテヲ取マクシテ目ヲ

らふそ　ア〳〵お頼ミ申升　シ〳〵橋の下のせうふハ誰か植たせうふよほうろんほろう〳〵おれか植たせうふよほうろんほろう〳〵〳〵内追〳〵（シテアトノソハヱ出ル）　ア〳〵又是へ出ました　シ〳〵誠ニ出た気遣ひするな物の滅せふ迚は此ことくふゆる物ちや心易思わしませ　ア〳〵か様にふへましてハ何とも気毒に存升早ふ祈けして被下　シ〳〵此度ハふきの印のむすひかけておませう　ア〳〵兎も角も早ふ祈けして被下（山伏印ヲムスヒイノル夫より茸追ゝ出テ山伏アト追込ナリ仕様アルヘし）　シ〳〵ハアゆるして呉れい〳〵祈〳〵入仕様工風アルナシ

廻シテコケルト茸皆ゝワキサニ并フ此間ニアト腹ヲ立シテ柱へ行右ノ肩ヲヌキ右ノ方ヨリシテノソハへ行トントフミテ〳〵ヤイ爰な者シテ驚立テ〳〵何しや　最前から茸の出来ぬ様にとこそ頼め此様に出来る様に祈ると言事か有物か〳〵ヤあら爰な者か某も精出て祈れ共出来れハせう様か無〳〵また其つれを言扨ゝにくいト言テ追回スシテニケテワキサへ行時皆ゝシテを追込二人トモニケテ入ル〳〵なふおそろしや命有ての山伏しやゆるしてくれ〳〵〳〵ちやとこされ〳〵ト言入也

五本のうちの『和泉流秘書』と『型付本』の二本のみが「替仕様」を持っていることを示した。『和泉流秘書』はここで問題にしている当該本であるがもう一本の『型付本』については池田広司氏が『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』（風間書房　昭和四十二年）第一部和泉流に「最近、佐藤友彦氏によって、山脇和泉系の台本で、型付けが中心に書写されていることから仮りに『型付け本』と呼ばれている十冊本（二百五十番所収）が紹介された（『狂言』第八五号参照）。波形本より古くはないが、江戸中期から末期にかけて完備された後期台本への一つの過渡期の狂言を示している貴重な書であるという」と紹介されているものの、佐藤友彦師保管の未公表のものであるのでこれ以上のことは言えないのだが、『和泉流秘書』を書写した頃に、それは『雲形本』の元業以前の家元山脇の誰かが、自分の考えにより工夫をこらして試みた狂言台本があったということになろう。それが『和泉流秘書』だと短絡的には言えないにしても『和泉流秘書』様の台本であったとは言える。以前「名古屋芸能文化第三号」（平成五年）の「和泉流狂言台本の

比較研究――雲形本を中心に――」の中の「愛知県立大学本と雲形本の比較分析」において林和利氏の言われた「『雲』書写にあたり、参看した一本に『県』またはそれに近い台本があった可能性もある。いずれにせよ、江戸後期においても、山脇系の狂言が流動性を持っていたことだけは確かである」に矛盾しない。矛盾しないどころかその言を確かなものにする結果となった。